様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１３８０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０４７０

研究課題名（和文）カナダ北西海岸地域諸言語の形態統語法に関する記述的研究

研究課題名（英文）A descriptive study of morphosyntax of the First Nations' languages in the Northwest Coast of Canada

研究代表者
堀　博文（HORI, Hirofumi）

静岡大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：１０２８３３２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究課題は，カナダのブリティッシュ・コロンビア州で話されるハイダ語と海岸ツィムシアン語を対象に，文法面や情報構造に関する様々な言語事象の解明を図ることを主な目的とするものである。
　まず，ハイダ語に関する成果としては，動詞の形態法にみられる複統合性を再吟味し，様々な要因によってそのような特徴付けが必ずしも妥当ではないことを指摘したことに加え，情報構造との関係で３人称代名詞の自立形とクリティック形の現われを明らかにしたことがあげられる。一方，海岸ツィムシアン語については，所有表現のうち譲渡可能かどうかを示す接辞の現われ，等位接続詞を始めとする接続詞の機能と用法，人称標識などを解明した。

研究成果の概要（英文）：This project aims to elucidate various linguistic phenomena of Haida and Coast Tsimshian spoken in the Northwest Coast of British Columbia in Canada.
The outcomes of this project are summarized as follows. With regard to Haida, firstly, the polysynthetic nature is reexamined to clarify that several morphosyntactic, semantic and sociolinguistic factors interact with each other to make Haida look less polysynthetic. Secondly, the choice between the free and bound forms of third-person pronouns is also explained in terms of transitivity of predicate verbs and information structure. Concerning Coast Tsimshian, functions of possessive affixes that show alienable and inalienable possession are explicated; the usage and function of connectives are examined to show that significant differences are observed among the speakers.

研究分野：言語学

キーワード：言語学　ハイダ語　海岸ツィムシアン語　言語類型論　北米先住民諸言語

１．研究開始当初の背景

本研究課題は，カナダのブリティッシュ・コロンビア州北西海岸地域で話されるハイダ語（系統不明の孤立言語）と海岸ツィムシアン語（ツィムシアン語族）を対象とするものである。これらの言語は，いずれも話者の高齢化が進み，言語の継承が十分行なわれていない状況にある。

しかし，こうした状況にありながら，両言語とも十分な記述研究がなされておらず，それらの全体的な理解を得るにはほど遠いのが現状である。

これらの言語のおかれた厳しい状況を背景としながら，本研究課題の研究者二名は，それぞれの言語に関する記述研究を積み重ね，多くの言語事象の解明に取り組んできた。ハイダ語についていえば，音韻面では従来よく理解されていなかった声調と音節構造の関係を明らかにし，また，形態面では動詞複合体とそれに関わる接辞の機能の分析を重点的に行ない，統語面では，その分析の基礎資料となるテキスト（自然発話）の蒐集を図ってきた。一方，海岸ツィムシアン語に関しては，音韻面で特徴的な「分断母音」の分析と解明を図り，形態統語面では，豊富な複数形の形成法とその現われの記述，更には，特に名詞と動詞の間の相通性と，それに起因する品詞分類の問題に取り組んできた。

このように，ハイダ語と海岸ツィムシアン語の記述研究を継続的に行なってきたことにより，それまで理解されていなかった言語事象の多くが明らかにされた一方，それらの言語の包括的な文法記述に向けて，十分な考察と分析がなされていない事象も多々残されていることもまた事実であった。特に統語面や情報構造に関する研究は，テキストの蒐集を図りながら進めてきたとはいえ，いまだ不十分であった感は否めなかった。

このような現状と問題意識を持ちながら，更に従来の研究成果を一層進展・深化させ，それらの言語の包括的な記述により近づけることを目標として，本研究課題を企図したのである。

２．研究の目的

本研究課題の目的は，ハイダ語と海岸ツィムシアン語の全体的な理解を得るために現地調査によって文法記述を行なうこと，また，その結果を，個別の言語記述の枠を拡げて言語類型論的な視点から考察することである。更に，その成果を現地で行なわれている言語教育に還元する方途を探ることも目的の一つとして掲げて研究を行なった。これらの諸点を具体的に述べれば次の如くである。

(1) 文法記述

①ハイダ語

まず形態面では，複雑な構造を持つ動詞の形態法を探るべく，それに関与する様々な接辞の機能や用法の解明を図る。特にそれら接辞同士の共起関係について，意味的な制約を中心に明らかにする。

統語面に関しては，主に複文構造に関する基本的な理解を得るとともに，特に，1 人称単数代名詞と 3 人称代名詞における自立形とクリティック形の使い分けを情報構造の観点も交えて分析することを試みる。更に，焦点標識の現われと語順の関係，また，関係節構造に関する基礎資料となり得る自然発話（テキスト）を蒐集し，その分析を併せて行なう。

②海岸ツィムシアン語

形態面に関しては，ハイダ語同様，複雑な構造の形成に関わる動詞の接辞のうち，特に動詞の項構造をかえるものを中心にその機能を明らかにするとともに，それらの接辞が統語面にどのように関与しているのかを明らかにする。

統語面では，複文の形成に関わる接続詞の使用範囲や，主節・従属節における人称表示を明らかにする。

上記の点を明らかにする基礎資料として，自然談話（テキスト）を蒐集し，その分析を併せて行なう。

(2) 言語類型論からの考察

(1) に述べた様々な言語事象を個別に記述するだけでなく，言語類型論的な視点から考察し，それぞれの言語の特徴を明らかにする。

(3) 言語変化に関する考察

ハイダ語，海岸ツィムシアン語には，幸いなことに，20 世紀の前半に行なわれた研究がある。例えば，ハイダ語には，20 世紀の初頭に人類学者の John R. Swanton が残した Haida texts and myths: Skidegate dialect（1905 年，Bureau of American Ethnology, Bulletin 40）やアメリカ合衆国のフィラデルフィアのアメリカ哲学会に所蔵されている未公刊の資料があり，また，海岸ツィムシアン語には William Beynon による Tsimshian texts（1932–9 年，Columbia University Archives）といった資料が残されている。いずれも現在の話者よりも一つないし二つ上の世代の言語形態を記録したものであるので，今となっては聞き出し得ないような情報が数多く含まれており，極めて貴重である。しかし，残念ながら，それらの記述には，特に音韻面や文法面における分析が誤っていたり，不十分であったりするので，そのままの形で利用することができない。そこで，現在の話者の協力も得ながら，それらの資料が将来においても利用できるような環境を整備するとともに，その途上において，現在の話者の言語形態との比較を行ない，それらの言語の構造的変化の一端を探ることを考える。

(4) 言語復興への貢献

１に述べた如く，ハイダ語，海岸ツィムシアン語はいずれもすでに日常の言語として機能しなくなりつつあり，言語の継承という点からいえば，極めて危機的な状態にある。そうした認識は，特にそれらの言語が話される現地でも強く持たれており，実際，新たな話者を増やすための言語教育が行なわれつつあ

る。そのための教材を開発するには，このような言語学的な記述研究が必要であり，そうした取り組みの一助となるよう，本研究課題で得られた成果や知見を現地の言語教育に還元することも目的の一つとした。

３．研究の方法

本研究課題を実施するにあたって旨としたのは，現地調査である。各年度においておよそ 1 ヶ月程度，ハイダ語と海岸ツィムシアン語が話されるカナダのブリティッシュ・コロンビア州の北西海岸地域に滞在し，それぞれの地において話者数名の協力を得ながら，調査を行なった。調査は，質問応答形式によって必要となる文法事項を聞き出したり，あるいは，統語面や情報構造の解明を図るために自由発話（テキスト）を蒐集したりすることを重点的に行なった。

また，現地調査に加えて，過去の文献資料（上記２を参照）と現在の話者から直接得た情報を対比させることによって，それらの言語における構造的な変化を明らかにすることを試みた。

４．研究成果

まず，本研究課題で得られた成果をハイダ語，海岸ツィムシアン語のそれぞれの (1) 形態法, (2) 統語法, (3) 言語形態の変異と変化, (4) 言語教育への還元についてまとめることにする。

(1) 形態法

３に述べたように，ハイダ語も海岸ツィムシアン語も，特に動詞が複雑な構造をなす複統合的な言語とみられている。確かに，ハイダ語に関していえば，動詞に関わる接辞の数と種類が多く，また，過去になされた言語資料（上記２ (3) を参照）にはそうした複雑な動詞が頻出する。しかし，現在の話者による自然発話をみる限り，実際に動詞に現われる接辞の数は多くなく，このような事実からハイダ語が複統合的言語と特徴付けられるとは言い難い。その要因として，まず，一つの動詞に盛り込まれうる形態素の数が限られていること，また，多くの形態素が方向や場所，位置を表わすなど意味的な偏りがみられるために 1 つの語の中に共起する形態素の数に限界があることがあげられる。更に，過去の言語資料に記録されたハイダ語の話者に比べて，現代の話者は，接辞に相当する概念を分析的に自立語で表わす傾向にあり，それゆえに，動詞の統合度が下がることも要因として指摘した。

一方，海岸ツィムシアン語については，主に動詞の項構造をかえる派生接辞を中心に，形態面と統語面の両方への関わり方を明らかにした。

(2) 統語法

まず，ハイダ語について述べると，ハイダ語には，1 人称単数動作者格代名詞（＝主語に限られる）と 3 人称代名詞（主語と目的語のいずれにも現われ得る）において自立形とクリティック形の区別がある。そのいずれが現われるかは，統語的な要因（すなわち，他動詞節において目的語が省略されているか否か，動詞の他動性の程度，複文構造において従属節・主節のいずれに現われるか）に加えて，談話的な要因，すなわち，それらの代名詞の指示物がその談話において初めて導入されたものか，あるいは，活性化されているものであるかといった点が関与していることが明らかにされた。

一方，海岸ツィムシアン語に関する成果を述べると，海岸ツィムシアン語には，原因・理由節や条件節の形成に用いられる接続詞が複数存在するが，それらの使用に際して，主節・従属節におけるモダリティの現われ，時制・アスペクトや人称，節の順序における制限などの観点から分析を行ない，その結果，それらの接続詞の多くが様々なモダリティにおいても使用され得ること，また，時制・アスペクトや人称，節の順序についてもかなり自由であることが確認された。

更に，主として節・文をつなぐのに用いられる等位接続詞が，単なる等位関係だけでなく，継起，因果，対比，逆接等，さまざまな関係を表わし，加えて，話題を転換したり，間を埋めたりするのにも使われること，あるいは，表わされる関係により，時制・アスペクトに偏りがあることが分かった。

また，海岸ツィムシアン語における語順について，無標のそれは動詞 (V)―主語 (S)―目的語 (O) であるが, V 以外の要素を焦点化して節のはじめに置くことができる。焦点化が，S, O といった名詞のみならず、所有者名詞や場所・随伴者・手段といった斜格名詞にもみられることを明らかにした。

(3) 言語形態の変異と変化

現在のハイダ語話者の間には，音韻面あるいは形態音韻面における差異が認められる。そのほとんどは，おそらく不完全な言語継承によるものと考えられる。すなわち，現在の話者はそのほとんどが 80 歳代であるが, その幼少期においてすでに家庭でも英語が多く使われ，自然な形でハイダ語が継承されていなかったとみられる。更に，多くの話者が，他所への移住や結婚などにより，ある程度の期間, ハイダ語を使わなかった時期があるなど，必ずしも常にハイダ語を使っていたわけではない。そうしたことから，まず，話者の間には，運用能力の面において差異が認められ，それが話者の間における言語形態上の変異となって現われていると考えられる。更に，今の世代の二つ上の世代（つまり，祖父母の世代）の言語形態を記録した過去の資料（上記２を参照）と比較すると，例えば，形態音韻規則や動詞形態法，統語法の単純化，文法的区別の消失が往々にして観察される。やはりこれも不完全な言語継承に起因するものであり，それが話者の言語運用能力の差となって現われていることを指摘した。

一方，海岸ツィムシアン語では，人称標示に 3 セットの dependent pronominal（2 セットの人称接尾辞と人称クリティック）が用いられ，どのセットが用いられるかは，時制・アスペクトが関係する。比較的年齢の低い一部の話者について，人称標示の用い方に変化がみられる（時制・アスペクトによる使い分けを行なわない）ことが観察されていたが，あらためて話者たちから聞き取りを行なった結果，ほとんどの話者が現在も時制・アスペクトによってそれらを使い分けており，使い分けがみられない話者はきわめて少数であることが判明した。

ここに述べた成果について，年齢や出身地の異なる，より多くの話者から聞き取り調査を行なって更なる検証をする必要があるが，ハイダ語，海岸ツィムシアン語のいずれも日常の言語として使われる場面が段々限られてきており，また，話者が高齢化している中において，その実現は，ますます難しくなることが予想される。

(4) 言語教育への還元

本研究課題を通じて得た成果を現地の言語教育に還元する方途を関係者と協議した。また，現地の機関で作成・開発されている各種の教材について，言語学の立場から助言した。

以上，述べてきた研究成果のいくつかは，国立国語研究所など国際的な発進力のある機関の出版物あるいはシンポジウムにおいて英語で発表した。また，現在とりまとめている成果もあり，それらもいずれ国内外において発表することを計画している。

上述の通り，本研究課題によって一定の成果が得られた一方で，今後に向けた課題もいくつか残されたことも指摘しなくてはならない。まず，文法記述の面では，それぞれの言語における語順の問題と情報構造の関係（例えば，ハイダ語における焦点標識の現われや海岸ツィムシアン語における動詞以外の要素の前置など），関係節構造などの問題は，それらを明らかにする基礎資料が集まりつつあるものの，今後も継続的に現地調査を重ね，テキストの蒐集を図り，分析を行なう必要がある。更に，これらの言語にみられる構造的変化については，現在の話者との違いをより明らかにすべく，現地調査を行なうことはもとより，過去の文献資料も継続的に整備しなくてはならないであろう。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

①Hori, Hirofumi, “Polysynthesis” in Haida, T. Kurebito (ed.), Linguistic Typology of the North, 3, 23–58, 2016 年，査読なし

②笹間史子，海岸ツィムシアン語の等位接続詞 ada について，大阪学院大学外国語論集，69，36–49，2016 年，査読あり

③堀　博文，ハイダ語の人称代名詞の自立形とクリティック形について，静岡大学人文論集，66 号 (1)，185–214，2015 年，査読なし

④笹間史子, 海岸ツィムシアン語の複数表示，日本語学，33 巻 (15)，76–86，2014 年，査読なし

⑤堀　博文，危機言語にみる変異と変化―ハイダ語（北米先住民諸語）の場合，明解日本語，18 巻，75–97，2013 年，査読なし

⑥ Sasama, Fumiko, Five levels in Coast Tsimshian, T. Tsunoda (ed.), Five Levels of Clause Linkage, 1, 95–125, 2013 年，査読なし

〔学会発表〕（計１件）

① Hori, Hirofumi, “Polysynthesis” in Haida, International Symposium on Polysynthesis in the World’s Languages, 2014 年 2 月 20 日，人間文化研究機構国立国語研究所（東京都立川市）

６．研究組織

(1)研究代表者
堀　　博文（HORI, Hirofumi）
静岡大学・人文社会科学部・教授
研究者番号：１０２８３３２６

(2)研究分担者
笹間　史子（SASAMA, Fumiko）
大阪学院大学・情報学部・准教授
研究者番号：６０３３０１１４